



会ったのは、1998年。知人に誘われて「第3回FIDジャパン・チャンピオンシップ」を観戦したときだった。

初めて目にするID (Intellectual Disability) バasketボールは、小川さんにとって驚きの連続だった。まず知的障害者が自分たちとまったく同じルールで、同じコートで試合をしているということと自分が衝撃だった。しかし、一番のショックは、Basketボールに臨む選手たちの姿勢だったという。

「ある選手は、シュートを決めると、試合中であるにもかかわらず、雄叫びを上げて喜んでいました。チームの関係者に『早く(デフエンスに)戻りな!』と大声で注意されるまで、ゲームの流れすらも忘れ、シュートを決めた達成感に浸り切っていたのです。その選手ばかりではない。コートを駆け回るすべての選手の表情が、Basketボールができるという嬉しさと満足感で輝いてい



おがわ なおき: 1965年生まれ。1988年、日本体育大学卒業。大学4年時に学生無敗記録達成。1988年、日本鋼管株式会社(NKK)入社。第25回日本リーグ優勝。第27回日本リーグ優勝。1998年、NKK退社。1999年、日本FID Basketball連盟理事就任。シドニー・パラリンピックID Basketball日本代表コーチ以降、ID Basketball日本男子代表チーム・ヘッドコーチを務め、本年(2006年)、横浜市で開催された「デンソーカップINAS - FID Basketball世界選手権大会」ではコーチ、大会事務局を兼任。

た。企業の名前や日の丸を背負い、勝つことだけを目指してきた小川さんにとって、その姿勢は、あまりにも初々しく、そして眩しかった。

ただ、その一方で疑問も感じた。選手も、監督も、あまりに勝負を忘れ過ぎていた気がしたのだ。実際、大会終了後に選手たちと話しても、チームの勝ち負けを話題にする者は、ほとんどいなかった。「この時、彼らに勝つことの喜びも教えてやりたいと感じたのです」

多くの知的障害者は、はつきりとした目標もないまま、与えられた時間を、淡々と過ごしている。そんな彼らに、勝利を目指すという価値観を教えてあげること、将来に夢や目標を持つことや、張りのある生活を送って欲しかった。

その想いを実現するには、自らコーチするのが近道であり、最善の道ではないのか。ただ、1998年当時の鉄鋼業界は不況のどん底にあった。鉄冷え」といわれる時代で、小川さんが勤務していた日本鋼管も、懸命の経営努力を続けていた時期である。そんな最中、会社員とID Basketballチーム・チームのコーチという、2足のわらじを履くわけにはいかなかった。

会社を辞めて、ヘッドコーチ専念を決意

しかし、1999年に入って状況は大きく変化した。ID Basketballが2000年に開催されるシドニー・パラリンピックの正式種目となったことを受け、国もナショナルチームを結成することを決めたのだ。そして、ナショナルチームのヘッドコーチ(監督)として白羽の矢が立ったのが、小川さんだった。

このころ小川さんは、ID Basketballボールに対する支援の不十分さ、そして一般の人々の無関心さをより強く実感するようになっていた。現状を打破するためには、まずは、シドニー・パラリンピックに出場し、勝つしかない。そしてID Basketballそのものの知名度を上げるしかない。しかし、パラリンピックまであと1年。会社の業務の片手間にコーチをするだけでは、十分な指導などとてもできない。悩み抜いた末、ついに小川さんは会社を辞め、ナショナルチームのコーチに専念することを決めた。だが、生活はどうするのか。周りの人間は当然心配した。

「何とかなる」と妻を説得。横浜市内のグループホームの職員になり、夜はメンバーのナイトケアとして選手4人を含むメンバーの面倒を見ながら、昼間はボランティアとして選手たちに臨むことである。

「ナショナルチーム結成当初、何度も同じミスを繰り返した選手に対しては、遠慮なく『致命的だ!』と言い渡しました。この言葉を聞いて、チームのメンタル・ドクターはID Basketballの世界で致命的といわれては、社会的弱者である彼らは、もう立つ瀬がないじゃないか。配慮が足りないよ」と僕にアドバイスをしてくれた。ただ、こつこつとアドバイスを聞き入れて、自分なりに理解をするように努めました。その手の配慮や優しさこそが、選手の自立しようとする心を萎えさせ、強さを奪ってきたのだから」

テアとしてナショナルチームの本格的な指導を開始した。

巨大なハンマーとなってタブーを壊す

専任のヘッドコーチとなった小川さんが掲げた目標は、ずばり「シドニーで勝てるチームを作る」こと。小川さんは、改めて選手を選び直した上で、強化合宿を実施、チーム力の底上げを図ろうとした。ところが、その挑戦は、いきなり大きな壁にぶつかってしまった。



身長195cmの長身。事務所がいつも狭く見える。

「初日、選手に練習開始の号令をかけても、彼らはやってくる来ないのです。みんなベンチに座って足を投げ出している。何をしているのかなと思っ見ていたら、なんと選手たちの支援者が彼らに靴を履かせてやっているのですよ。靴ばかりではない。休憩時間にはタオルも水も支援者が持つてやっていました」

球技とはいえ、Basketボールは相当に

激しいスポーツだ。リバウンド争いでは、全体で相手選手を押しつけなければならぬ。また、一瞬の判断が試合の行方を大きく左右することもある。激しい闘争心とすばやい判断力がなければ、結果がでないスポーツなのだ。それだけに、選手の性根に、「誰かに世話をしてもらって当たり前」というような甘えがあつては、どんなに技術を向上させても勝つことはできない。「これではパラリンピックで世界の頂点を目指すなど、夢のまた夢です。さすがに途方に暮れました。もう、コーチを降りようかとも思いましたよ。でも一度受けたことですからね。腹をくくってやり遂げるしかない」

まずは、障害者に自立や勝ち負けを求めている世界から、選手たちを引きずりださなければならぬ。最初に小川さんが選手たちに命じたのは、靴の紐を結ぶことだった。続いて、練習中、選手の支援者たちのコートへの立ち入りを一切禁止した。「選手たちから、やってもらうて当たり前」という感覚を、周りにいる善意の大人たちからは、「やってあげて当たり前」という意識を、追いつくことから始めようと思つたんです。繰り返ししますが、自分ができることは自分ですという姿勢がなければ、競技スポーツなどでは「せん」

冒頭のシーンのように選手を怒鳴り散らすなど、日常茶飯事だった。差別用語まみれの物言いで選手を罵倒し、挑発することだつてあつた。その姿勢は、タブーに挑戦するなどという程度の生やさしいものではない。いわば自らが巨大なハンマーと化し、選手を閉じ込めているタブーを壊しにかつたのである。

小川さんは言う。

「僕がこのような指導ができたのも、優秀なチームスタッフに恵まれたおかげです。僕がムチで、スタッフはアメ。そういう体制が取れたからこそ、できたことです」

ゲームに勝つただけでなく、社会で生き抜く力を

それにしても、なぜ、そこまで強烈にタブーに挑んだのだろうか。その理由について小川さんは、「ゲームに勝つただけではありません。最大の目的は、選手に、社会で生き抜く力をつけてもらうためです」と、力を込める。

ナショナル・チームに参加できるような軽度の知的障害者は、たいてい、学校卒業後は社会人としても働くことになる。自ら生きていくためだ。ところが、せつかく職に就いても、会社を辞めてしまう人たちも増え続けているという現実もあるのだ。

今回のメンバーのなかにも、就職したその翌日に、辞めてしまった者がいた。幸い、彼は何度かそつじた繰り返し未、別の仕事に就くことができたが、なかには、そのまま社会からドロップアウトしてしまう選手も珍しくはない。

「彼らが仕事を辞める理由は、職場でうまくコミュニケーションが取れなくて居つら



最終日、全試合を終えてクロージング・パーティーが開かれた。男子チームも女子チームも試合のプレッシャーから開放されて、飛び切り明るい笑顔がはじける。

「ナショナル・チームの選手といふことは、国の代表として勝つために戦うアスリートである、といふことです。知的障害者は確かに技術を身に付けたりするのに時間がかかりはします。でも、それだけで、彼らを障害者という“枠”に押し込めた上、『これだけしかできないのだから』と決め付ける、あなたの方の見識の方が誤っているのではないですか」

それでも、メデアや一部支援団体の批判は、なかなか治まらない。ある意味、四面楚歌といえる状況でパブリックを目指した小川さんだったが、その支えとなっていたのが、日々、成長していく選手たちだった。「最初、彼らは、いつも下を向いていました。しかし、いつの頃からか次第に前を向くようになってきた」

いろいろなことを支援者にもやってもらい、

いとか、仕事のことと怒鳴られたとか、そのような程度です。言い換えるなら、現在の養護学校では、その程度の忍耐力を養うような教育すら施されていないこととでしょう。私が、選手たちを厳しく指導する本目的は、その忍耐力や社会に対する適応力といったものを養ってもらうことにあるのです。ただ、このような話は、知的障害者全般について言っているわけではありません。あくまでもナショナルチーム・レベルに限ったことです。軽度の知的障害者は、障害者と言っても、目が不自由



日本代表チームのキャプテン津江祥平選手。優勝チームのポルトガルとの練習量には格段の差があるが、キャプテンらしく落ち着いたプレーで味方をリードした。

だとか、足が不自由とかいった障害と違つて、見ただけでは非常に分かりにくい。いろんな意味で誤解を受けることも多いのです。だからこそ、社会で生きていくために忍耐力やコミュニケーション能力を身に付けて、自ら乗り越えていく欲しいのです」

厳しい指導も激しい物言いも、すべては選手のため。その熱い想いは、「ほぼ毎日、

指示を受けて動くだけなら、下を向いていればいい。余計なものを見なくて済むから、そのほうが楽でもある。ただ、下を向いては、自分で考え動くことはできない。前を向くようになってきたといふことは自ら考え、状況を判断して動くようになってきた、という証である。

さらに彼らのコミュニケーション能力も次第に向上していった。当初は、人前でしゃべることできない選手ばかりだったが、図面を使つてのミーティングを繰り返したり、その日の試合やトレーニングに関する日誌を付けることにより、次第に自分の意見を言えるようになってきた。

「日誌はテーマを決めて書かせています。そのテーマも、最初は他愛もないものでした。でも最近は、バスケットマンらしいテーマをこなせるようになってきました。『今日の3対3のドリルではディフェンスはこう動いたが、あなたならどう対応するのか』とか。さらに、現在では選手だけでミーティングを開き、問題点の洗い出しなどについてディスカッションをするようになってきました。ずいぶんと進歩したと思います」

こつした取り組みが功を奏し、1年後の2000年10月に開催されたシドニー・パブリックに日本チームも何とか参加できるまでに成長した。しかし、このときナショナル・チーム全員で実施できた強化練

選手と生活や食事を共にしてきました。食事はすべて妻がトレーニング時期を考え、栄養面を配慮しながら作ってきました。アスリートの育成には食生活が非常に重要だからです」といつ小川さんの日常を見るだけで、十二分に伝わってくる。妻も子どもたちも、家族が一丸となって小川さんの想いをバックアップしているのだ。

四面楚歌のなか、日々成長していく選手たちが支えに

ただ、それでも、彼のやり方を問題視する人々もいた。特に昔から知的障害者を支援してきた人々のなかには、いまだに小川さんを批判し続けている人もいる。

メデアも反発した。記者たちは、小川さんが選手を怒鳴ったり、厳しく指導している姿を見かけるたび、試合の成果は二の次にして指導法に関する質問を浴びせかけてきた。ナショナル・チームの活躍を報じた記事より、小川さんを批判する記事の方が、大きく取り上げられたことさえあった。

「障害者をそんなに厳しく指導していいの、と問い詰めてきた記者もいました。質問といつより、意見に近いものでしたね」連日、敵意に満ちた取材や批判にさらされる小川さん。しかし、どんな取材に対しても、彼の答えは決まっていた。

習は、毎月1回程度。総日数でも29日に過ぎなかった。そんな日本チームが、IDバスケットの歴史が古く、練習量も格段に多いヨーロッパやオーストラリアの強豪と戦いができるまでに成長したといふことは、大変な成長だといつてよい。1年前まで支援者に靴の紐を結んでもらっていた選手たちが、国際大会の場で果敢に戦つたのである。結果は最下位に終わったが、「同じ知的障害を持つ人たちでも、頑張って練習を重ねればあそこまで強くなれるんだ」という目標が選手たち1人ひとりの胸に強く刻み込まれたのは、目を見れば分かった。

あと、年間200万円あれば…

しかし、解決されない課題は、まだまだ残っている。そもそも、十分な練習日数が確保できないという根本的な問題ですら、6年経つたいまもまったく解消されてはいないのだ。事実、今回の「デモンソーカップ2006年INAS FIDバスケットボール世界選手権大会」に向け、日本代表チームが全体練習を行なつたのは約2年間で海外遠征、国内合宿を含め、39日間。「みんな全国各地から招集している選手ですし、休めば職場は有給ではない場合が多いので生活も苦しくなる。国や自治体、あるいは企業などから支援がなけれ



男子決勝戦ポルトガル対ロシア。優勝国ポルトガルのキャプテンのアントニオ・ロベス選手(左端)は、試合後のインタビューで、「ロシアにはヨーロッパ選手権で僅差で負け、非常に悔しい思いをした。今大会に向け、われわれは最初からただひたすら打倒ロシアを合言葉に、1か月前から合宿をして練習を重ねてきた。優勝できて本当にうれしい」と語っていた。そこには、小川氏が最初から目指していた「勝負への執念」が見て取れた。

大きいものがあります」

選手にとっては死活問題だろう。

結局、不足した分の資金は、関係者が集めてくるしかない。今大会を開催するに当たっては、当初予定されていた公的な支援が大幅に削減されたこともあって、小川さんたちは手分けして二百数十社の企業をまわり、協賛や後援を求めたが難航を極めた。

また、特製の募金箱を作り、資金集めをしようとも試みたが、その募金箱を置かせてくれる「コンビニ」エンス・ストアやスーパーすらも見つからなかった。一時はアジア初の大会がその開催さえも危ぶまれるほどだった。

「車椅子バスケットか」と違って、見た目に分かりにくいから、絵になりにくいんだよねえ。当社の宣伝としても」と言って断わる会社も多かった。結局、二百数十社中、応じてくれたのは、ほんの一部の企業だったという。

もちろん、(株)デンソーのように、IDバスケットボールを本気で支援してくれた企業や団体もある。同社は1999年から愛知県安城市の体育館を強化合宿の会場として提供した上、窮状を知って今大会の冠スポンサーにもなってくれた。横浜市



文化体育館での世界大会には、延べ400人近くの社員や関連会社の社員が駆けつけ、大会を盛り上げてくれた。しかし、そんな企業や組織はまだ少数派だ。最近ではCSRとか企業の社会的責任とか盛んに叫ばれているが、企業の掲げる理想と現実には大きなギャップがある。

「幸い今回はこうした現状を救うため、デンソーさんをはじめ、幾つかの企業や組織が支援してくれた上、各地から集まったボランティアの協力もあり、何とか大会は無事に終えることができました。それでもIDバスケットボールのナショナルチームが、思うように練習すらもできないような状況にあることは変わりありません」

小川さんによれば、あと年間200万円の資金があれば、練習もままならない現状からは脱却できるらしい。年間200万円である。実に慎ましい金額ではないか。わが祖国・日本は、世界第2位の経済大国で、世界中に巨額のODAをばら撒いている豊かな国、のはずなのだが…。

ば、いくら国際試合で勝つために合同練習をさせたくても、選手を集めることすらままならないのです。これはIDバスケットボールに限ることではなく、障害者スポーツ全般に言えることです」

事実、今回の大会で優勝したポルトガルの選手に聞いてみると、日本に来る1か月前から全員で強化合宿に入っていたし、もう何年も少なくとも毎週2回、1〜2時間の練習は積み重ねてきたという。IDバスケットに対する支援も歴史も比べようもないほど上なのである。

「日本では、国の代表として出場するナショナルチームだというのに、海外遠征する際の旅費ですら、ほとんど個人負担という状況です。もちろん、選手たちにはある程度の自己負担が必要かもしれませんが、もともと低所得の彼らにとってはそれにも限界があり、連れて行けない選手もいます。彼らの精神的ダメージは、あまりにも

大きいものがあります」

\*1 INAS FIDETは、International Sports Federation for Persons with an Intellectual Disability(知的障害者を持つ選手たちの競技指向的なスポーツの国際な統括団体。正式名称を国際知的障害者スポーツ連盟という)。  
\*2 シュートミスにもよって落ちてくるボールを確保する行為。得失点に直結するため、特に重要視される。